『見えない希望』

「どんな女なのか見てもいいか？」
「……構わんが、気を付けろよ」
　ウィリアムは隣室へと続くドアを開けた。
　中にいたのは、アーリー・オサードと、縛られた女性と、少女。
　それから、負傷した中年の男――犯罪者の一人だった。
「動かさないでください。骨がきちんとくっつきませんよ」
　苦しげなうめき声をあげているのは、犯罪者の男だった。
　捕らえられた女性――ノアは、足を縛られた状態で、男の腕の治療をしていた。
　もう一人の、貴族の少女は倒れたまま動かない。
「あまりうるさく騒ぐものだから、少し脅してあげたら気を失ったの」
　アーリーが冷たく微笑んだ。
「ウィル、彼女に触ってはダメよ。この娘は類まれな魔力をもっているわ。こんなふうに触れただけで」
　アーリーがウィリアムに手を伸ばして、彼の頬に手を添えた。
「体内の水を飛はされ、あなたは干からびてしまうかもしれない」
「水魔法も、使い方によっては怖いんだな」
　一先ず、ウィリアムは捕らえられた女性たちが無事であることに安堵した。
「それで、これからどうするんだ？　そんな危ない奴をいつまでもここに置いておくわけにはいかないだろ」
「二人はいらないわ。貴族の方を連れていきたいところだけれど、医者の方にしようかしらね。魔力が高いこともそうだけれど、幼すぎて彼らを満足させられそうにないから」
　くすりとアーリーが笑い、犯罪者の男達も卑猥な笑みを浮かべた。
　彼女たちの服を脱がせ、髪を切り、障壁内の至る所に散らばして、騎士団を散らばせる。
　それから各所を襲撃して、混乱を起こすのだと、アーリーはウィリアムに説明をする。
「わかった。協力はする……ただ、聞いておきたいことがある」
　ウィリアムは冷たく微笑むアーリーを見詰める。
　町で誘ってきた彼女は、穏やかな顔の女性だった。
　今この場にいる彼女は、露出度の高い服を纏い、化粧と真っ赤な口紅で印象を変えている。
　どちらの顔が彼女の本当の顔なのだろうか。
「あんたは、どんな理由で人々の未来を壊すんだ？」
　ウィリアムは仲間になった理由として、希望を持ち続けることに疲れたからと話してあった。
　洪水発生前に、浮浪児の仲間を海に送り出した。
　箱船で探しに行けたらと思っていたが、あれから２年の時が過ぎて。
　いつまでも希望を持ち続けるのも疲れたと。
「人に未来なんて、ないからよ。あなたのように疲れている人を、早く眠らせてあげたいの」
「疲れてない奴もいる。希望を持ち続けている奴も――出航した船に優れた水の術者がいたら、波から保護できた可能性はあるか？」
「一人二人じゃ無理だ。特異な力を持った魔術師が１００人くらい乗ってたら別だが、能力に秀でた特異能力者なんて、そうごろごろいるわけじゃねえし」
　魔術師の魔法であの大洪水から船を守る手段など、なかったと、魔法を使える者が答えた。
「ただ、真っ先に出航したクルーズ船は、波を逃れているかもしれないわね」
　そう言ったのはアーリーだった。
　しかし、続く彼女たちの言葉に希望はなかった。
「陸地は全て水の中に沈んでしまって、水は今なお引いていない。積み込んだ食料は一ヶ月分足らずでしょうから、とても苦しい思いをして、子供達は亡くなったのよ」
「俺は水の神殿で、先代の神殿長に仕えていた。この場所の深さはだいたい分かっている。地上に島なんて残っていないことも。それを伝えようとした、そして捕まったんだ」
　そう言ったのは、タッカル・ミーリルという若い男性だった。
　彼自身は地の属性の魔法が使えると聞いている。
「私達の最初の目的は、絶望を迎えにいくこと。居場所は概ねわかったわ。その為に、騎士団の目をそらさせる必要がある。次は他の犯罪者が掴まっている倉庫の破壊と、魔法学校の寮を狙うわよ。ウィル、どちらかに行ってくれる？」
　ウィリアムは即答は出来なかった。
　絶望を迎えに行くとはどういうことだろう。
　すべて水の中に沈み、海上に希望などないということを、証明できる人物でもいるのだろうか。

　シャンティア・グティスマーレは気絶した振りをして、話を聞いていた。
　とにかくここから逃げ出したい。
　今すぐに帰りたい。
　だけれど、あのアーリーという女性に触れられただけで。
　適わないと彼女に流れる魔力が震えた。

※こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
ウィリアム
ノア・ラメール
シャンティア・グティスマーレ